

「ドイツ学生派遣プログラム参加報告書」

京都大学経済学部 3年 孫 汝佳

今回のドイツ訪問は10日という短い期間であったが、今後の進路を考えるうえで非常に参考になった。

私は大学でドイツ語を2年間勉強したので、ネイティブの方とドイツ語で会話することを楽しみにしていたが、いざ現地に着いてみるとみんなCDの2倍くらい早口で話していた。しかも、私たちが訪れたフランクフルトとハイデルベルクでは標準語である高地ドイツ語とかなり発音が異なっていたので、最初は聞き取るのにとっても苦労した。ドイツではほとんどの人が英語を話せるが、私は出来る限りドイツ語を話そうと決めていたので、困ったときには、「もう少しゆっくりと話してくれませんか?」とか「もう一度お願いします。」と言った。すると大抵の場合相手は丁寧に説明してくれた。我々は高い語学力が無いと外国人とコミュニケーションを取れないと考えがちだが、そんなことはない。相手を理解しようとする心があれば、たとえ拙い会話であっても、時にはジェスチャーだけでも、通じるということドイツで学んだ。

ゲーテ大学で私たちは大学院の授業に出席させてもらった。大学院の授業は全て英語で行われるが、内容は組織論のようなもので、学部生の私にも8割は理解できた。階段教室でのレクチャー形式の授業であったが、教師が一方向的に話すのではなく、生徒に討論する時間を与え、その後意見を述べてもらうというようなことも行われていた。また、生徒が教師の話の趣を遮って質問をしたり異議を唱えたりすることもしばしばあった。全体的に日本の大学よりも活発に議論が行われているという印象を受けた。

ハイデルベルク大学ではワークショップに参加した。様々な文化的・学術的バックグラウンドを持った人々が集まっており、日本からの留学生もいた。ハイデルベルク大学側の発表者は全員留学生で、それぞれの出身国の歴史や文化に関する発表を行った。やはりここでも議論が活発になり、休み時間中もずっと意見交換をした。

ドイツは全体的にとっても寛容な社会だと思った。街の至るところでトルコ料理店を見つけることが出来るし、駅の一角ではジャマイカ人の家族が搾りたてジュースを売っていた。残念ながら最近ドイツ国内でも移民排斥運動が起きているが、私はこのような「多様性」のある社会を面白いと思った。しかしドイツの移民政策も完全に成功したわけではない。フランクフルト駅の周辺では移民と思われる路上生活者を多数見かけた。今後、メルケル政権の難民政策の行方に注目したい。

今回のドイツ訪問を通じて、ドイツ社会への関心がさらに深まった。大学院生になったら、ドイツに長期留学してみたいと思っている。